OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	汽水域としての仏領インドシナ : 近代日本の短期滞在者による「同胞」の発見とその表象
Author(s)	橋本, 順光
Citation	人文学林. 2025, 2, p. 117-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100782
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

汽水域としての仏領インドシナ

―近代日本の短期滞在者による「同胞」の発見とその表象―[1)]

橋　本　順　光

Saigon as a “Brackish Water Port”: The Intermingling of East and West in the Discovery and Representation of “Compatriots” by Modern Japanese Visitors

HASHIMOTO Yorimitsu

This paper examines French Indochina (now Vietnam), particularly Saigon (now Ho Chi Minh City), as a unique “brackish water port” that epitomized the cultural intermingling of East and West. Serving as a significant contact zone for modern Japanese visitors, the city — renowned as the “Paris of the East” — showcased a captivating blend of Asian and European influences, characterized by its Haussmann-inspired boulevards, which contrasted starkly with the British colonial settlements in Hong Kong, Shanghai, and Singapore. The vibrant red-light district of prewar Saigon primarily attracted male Japanese travellers, who perceived it as an opportunity to experience colonial power dynamics in the manner of their European counterparts. However, Japanese prostitutes in Indochina were marginalized, forced to leave Japan during modernization, and branded a “national disgrace” as Japan expanded its imperial ambitions in Southeast Asia. Their poignant narratives, possibly inspired by the well-known story of *La Dame aux Camélias*, a story about the rarely visited grave of a courtesan, quickly faded into oblivion, overshadowed by male travellers’ glorification of seventeenth-century Japanese graves as symbols of colonial pioneering. This exploration of the Japanese occupation of French Indochina in the 1940s highlights a propagandistic endeavour to reconstruct hybrid spaces and narratives centred on Japanese male identity.

キーワード：からゆきさん　『椿姫』　日本人墓地　ベトナム

1）本論は，2024年3月9日にハノイ国家大学人文社会科学大学で開催されたシンポジウム「帝国航路におけるベトナムの存在感―日越仏の結節点」での「欧州航路の寄港地としてのベトナム―短期滞在者による「同胞」の発見と表象」を改稿したものである。発表と翻訳にご尽力くださったPhan Hai Linh先生，Vo Minh Vu先生，そして有益なご教示を賜った参加者の方々に改めて感謝したい。以降の引用は現代表記に統一したが，差別的表現はその歴史性を論じているゆえにそのままとした。

はじめに

19世紀後半から20世紀前半という旅客船の黄金時代，多くの日本の船客がサイゴン（現ホーチミン）に上陸した。彼らの多くは，ヨーロッパへの洋行の途上で，あるいはブラジルへの移民の旅の寄港地として，いわば途中下車のようにサイゴンの港に上陸した。南進論が盛んになる1920年代から1930年代には，仏印こと仏領インドシナ（当時は，安南と呼ばれた現在のベトナム）の視察が盛んとなり，ハノイやホイアンなどに向かう玄関口としてサイゴン港はしばしばその記録の冒頭に登場する。1940年代の日本の「仏印進駐」以降は，プロパガンダも兼ねて多くの日本の作家や画家らがサイゴンに上陸し，彼らもその滞在を書き留めている。これらの宣伝なり宣撫要員もまた，兵士の進駐同様に短期の滞在だったことに変わりはない。

そんな短期滞在者の記録には，彼らよりも先にサイゴンに訪れ，そこで生活していた「日本人同胞」への複雑な視線が読み取れる。香港とシンガポールの間に位置するサイゴンはまた，当時，「醜業婦」や「娘子軍」と呼ばれ，後に「からゆきさん」の名で知られる娼婦が1880年代くらいから移り住んでいた歓楽の港でもあった。国内での廃娼運動や海外からの人身売買批判もあって1920年代頃から新規の移住は減っていくが，彼女らの存在は，男性が多数だった日本の短期滞在者に独特の屈折をもたらし，仏印の風物と人々の描写に影を落とすこととなる。

そこで本論では，日本人船客の記録や創作を取り上げて，南進論が高まっていくなかサイゴンがどのように描かれ，「同胞」の表象がどのように再編され，統合されていったのかを考えたい。干満の差が激しく，複雑な海岸線とメコン・デルタを擁するベトナムは，淡水と海水が入り混じる汽水域で知られる。その点で，河を遡った上流に小さなパリとして建設されたサイゴンは，文化的にも汽水域ともいうべき場所となっていた。東洋の寄港地は多かれ少なかれハイブリッドな存在だったが，主要な寄港地だった英国領の港は小島のような場所に要塞として建てられ，商業都市の域を出ない。その点でサイゴンは，東洋にあって「パリ」を感じさせる数少ない街だった。同時にサイゴンは，東西だけでなく日本の南進をめぐる男女の表象が交錯した特異な場所ともなっていた。それだけに文化的な汽水域についての日本側の記録を概観することで，その混交に対する視線の変化を浮かび上がらせることが可能なはずである。

寄港地としての汽水域サイゴン

サイゴンの街の原型は17世紀に出来上がったが，フランスが注目したのは19世紀半ばになってからのことである。微粒子病によって蚕が死滅し，日本から生糸を輸入する必要が生まれ，1862年の第1回サイゴン条約で併合され，定期航路の寄港地として開発されたのだった。横浜からマルセイユを結ぶ航路にあって，英領の香港とシンガポールに伍してフランスの一大中継地となることを期待されてのことである。函館やペナン同様，英領の寄港地は，軍事要塞を兼

ねた商業拠点となっていたが，サイゴンはフランスの文明化の使命を体現する街として，パリを模した都市計画によって建設された。1887年にフランス領インドシナを成立させてからは，1898年にフランス極東学院の前身がサイゴンで創設され，1907年にはハノイに大学が開かれ，1920年代までにはハノイ，サイゴン，フエに高校（リセ）も作られた（岡田 2021, 207–9）。これらが現地人の高等教育だけでなく，アンコール・ワットの保護と研究，それに熱帯医学研究の促進という，植民地としての実益を見越した文明化であったのはいうまでもないだろう。

日仏を結ぶ航路が横浜から生糸を輸入するために整備されたのである限り当然ではあるが，サイゴンに上陸した最初期の日本人は，森の中に忽然と出現しつつあるヨーロッパ風の都市の成長を目の当たりにすることとなった。おそらく最初に上陸した徳川幕府の遣外使節は池田筑後守を団長とする使節団で1864年のことであり（柏木1986, 256–7），民間ではそれから半年ほど後，同じ1864年に函館から密航した新島襄が最初ではないかという指摘がある（柏木1999, 292–3）。いずれもフランス領になって約2年後であり，街はまだまだ普請中の新開地であった。そんなフランスの東洋支配の前途は遼遠だと的確に指摘したのは，徳川昭武を団長とする幕府最後の使節団に同行し，1867年にサイゴンを訪問した渋沢栄一だった。渋沢によれば，「製鉄所学校病院造船場等を設け東洋根據の要領となし大に他日の遠図をなす」ものの，「土地荒廃し人烟稀疎にて全く休養殷富にいたらず」，歳入はわずかに「三百万フランク」でしかないと，後の報告書『航西日記』で記している。「鎮府は江浜より八九丁隔り一箇の樹林清茂の地に在り劇場妓院もありて支那と同風なり」と，後の総督府と劇場，そして娼家を特記しつつも，「遊歩も懶く名勝の探るべき佳地もなし」というのである（大塚1928, 17–8）。香港とシンガポールという，英国の真に「東洋根據の要領」に圧倒された後のことであるので，「追々欧人移住せるものありて人員も増せりと云」と追記しつつも，見劣りしたのを隠せなかったのは当然であろう。

渋沢のような印象は，明治初期の使節でも繰り返されている。例えば1872年に東本願寺法主に随行してフランスへ渡った旧幕臣の成島柳北は，最初に目にしたフランス領であるサイゴンの街にさしたる関心を抱いていない。彼が『航西日乗』でわずかに注記したのは，その周囲にある「風景画」のような森やそこに遊ぶ猿の群など，南方ならではの珍奇な動植物や人々の習慣であった（井田2009, 20–2）。一方，翌1873年，岩倉使節団の報告書を記した久米邦武は，そんな密林と文明が奇妙に同居する当時のサイゴンの様子を活写している。使節団はアメリカとヨーロッパを回った帰路に，サイゴン港に到着しており，久米は「外国人居留地ハヤヽ修美ナリ」とその白亜の石造建築を評価しつつ，「河岸ノ小戸ハ，茅舎矮宇」と現地人の椰子の葉で作ったような粗末かつ不潔な家との落差をむしろ強調したのである。何より興味深いのは，「仏国政府ヨリ，年金八百万「フランク」ノ金ヲ郵船会社ニ付シ，往来此ニ立寄ラシメテ，此地ノ運送ヲ便ニシ，植民ヲ利シ，兼テ船客ヲシテ此地ノ民ニ散財シ，其利潤ヲ受シム，故ニ仏ノ郵船ハ必ス此ニ立寄リ，二日ノ程ヲ費スナリ」（久米1982, 315）と，船会社を補助して乗客を二日ほど寄港させることで，国策としてサイゴンを振興しようとしているという記述であろう。

実際，こうした国策は清仏戦争（1885）を控えた1880年代に功を奏することとなる。この時代，サイゴンは今も残る大通りや施設が続々と整備されていった。1881年作成のサイゴンを俯瞰した地図を見れば，教会と官公庁という聖俗の権力の座に向かってブルヴァールこと目抜き通りが広がり，広場や植物園が効果的に配置された現在のサイゴンの原型がほぼ出来上がったのがよくわかる。そんな渋沢のいう「他日の遠図」を実感したのが，1877年にリヨン大学で染色技術を学び，帰国して大阪商業会議所会頭にもなった稲畑勝太郎である。稲畑によれば，10代で目にしたサイゴンの印象は，異臭漂う現地人の「陋屋」と，「不釣合」に立派な「劇場と郵便局と総督官邸」ぐらいだったという。それが約半世紀後の1926年から翌年にかけて，仏印に派遣された稲畑は，「小巴里」の名にふさわしく成長したサイゴンに驚いたのだった。事前に大道路網と街路樹を準備することで，予定通りの都市を出現させただけではない。「男子を呼ぶ媒鳥」として「市内に日本の娘子軍の居住を許」す一方で，政府の援助によりパリからのオペラを劇場にかけて「婦女子の居つくよう」采配し，市が発展した今では娘子軍の片鱗も見当たらないようにするという「仏人の遠大な計画」に敬服したのである（稲畑1929, 51–3）。

事実，ベトナムの独立そして南北統一後，ホーチミン市へと名前が変えられ，フランスの軍人や政治家の名を冠した通りや広場のほとんどが改名されたが，旧市街の区画などの都市計画はフランス時代からほぼそのまま踏襲された[2)]。例えば総督府がフランス支配の象徴的な建造物として聳え立っていた場所に，現在は，いわゆる「統一宮」が建つ。前述の1881年の地図でも，先の現在のホーチミン市の象徴的存在である市庁舎はまだ建てられていないが，そこから川岸へとまっすぐに伸びるブルヴァールは、すでに活気あふれる様子で描かれている。その途中までが運河であるように，この通りは，もともと運河で河とつながっていたのを徐々に埋め立てて整備された。1880年代半ばには完全に埋め立てられ，ベトナムを侵攻した提督の名をとってシャルネ大通りと名づけられ，後にベトナムの皇帝にちなんで現在のグエンフエ大通りとなる。いずれにしても，シンボルとなる建物へと大通りが一直線に伸び，それに沿って街路樹と建物が整然と並び，人が賑わう街並みは，東洋ではサイゴンが屈指の存在だった。パリのシャンゼリゼを原型として、ロンドンのバッキンガム宮殿から延びるザ・マルやマーブル・アーチに続くオックスフォードストリート，ベルリンならブランデンブルク門へと集約されるウンター・デン・リンデンなど，同様の通りはヨーロッパ各地で作られていたのである。

「東洋のパリ」というサイゴンの別称が流通したのも，同時期のことである。しかるべき精査は必要ながら，同様の呼称はサイゴンの整備が本格化した1880年代からフランス人の間で言われはじめ，英語圏でも1900年頃には定着したと考えられる。例えば義和団事件を取材したアメリカのジャーナリストのジャスパー・ホワイティングが，1902年にサイゴンをパリのようだと書き記している（Cherry 2019, 130）。ヨーロッパを中心とする列強連合国軍と義和団との熾烈

2）ただし，パストゥールとイェルサンという医学者は，いまだ道路名にその名をとどめている。

な衝突で荒廃した北京を見た後だったという彼の個人的な事情も，サイゴンをことさらに美しく見せたことだろう。もう一つの異称である「東洋の真珠」とともに，サイゴンは，東洋にあって数少ないフランス領の国際港として，その特異性が強調された。これは，英領インドが大英帝国の王冠に輝く宝石として言及されたことと比較できよう。一世紀以上の英国支配により莫大な富をもたらす体制が完成していた広大な亜大陸の植民地に対して，サイゴンはごつごつした貝殻の中で輝く真珠のようだというわけである。つまりは小さくとも，東洋の闇に光をもたらす文明都市であることを示唆しており[3]，いずれの異称にしても，サイゴンが東洋にあってパリのオスマン流都市計画を体現していたことを伝えている。実際，シンガポールのような要塞島に築かれた港湾都市ではなく，蛇行する河を遡ると忽然と森の中にフランス風の都市が出現するのは，フランスの船客から見ても驚きだったようだ。例えば，後に長崎で日本人女性との短い「婚姻」を小説『お菊さん』（1887）で書いたことで名高い軍人作家のピエール・ロティは，1883年にサイゴンを訪れた時，街並みから故郷の港町ロシュフォールを連想したという（Brocheux 2011, 185）。実際，サイゴンのブルヴァールを前にして，ロティのように，自分が見知ったヨーロッパの街を連想した船客は多かったことだろう。

ただし明治の前期では，サイゴンの小巴里としての側面に感心した日本の船客は少なかった。成島柳北は，パリでブルヴァールのレーヌ大通りについて，「両側に列樹有り，亦勝地なり」（井田2009, 50）と感心しているが，その原型をサイゴンで目にしたことには気づいていないと思しい。ただし，そんな彼らの多くが蛇行する河沿いの森に注目したのも，象徴的な白亜の植民地建築が点在するなかで貧しい現地の陋屋が混在していることを特記したのも，いわば文明が「不釣合」に混在しているからであろう。函館や横浜もそうであるように，英国の寄港地が銀行やホテルなどを居留地に集中させるのは，現地の民族や政府との衝突に備えてと考えられるが，サイゴンは，仏領インドシナの首都として象徴的に建設されたため，およそ都市の構造が異なっていた。街路の基点ごとに「不釣合」なほど壮麗な建築を配置し，街路の建物を徐々に改築してゆく深謀遠慮は，稲畑も記すように後になって合点がゆくものだった。その点で注目したいのは1884年にドイツ留学へ向かう途上，サイゴンを訪れた森鴎外である。その『航西日記』の記述が，柳北の『航西日乗』に負っている可能性は，前田愛の『成島柳北』（1976）以来，詳細に検討されてきた（例えばフレーリ 2002）。ただ，その間の12年間にサイゴンには現在も残る大教会が建てられおり，1888年に帰路でサイゴンを再訪した際には，ほとんど記録を残してはいないものの，稲畑同様に，鴎外もヨーロッパ風の街並みが出現していることに気づかされたのではないか。実際，サイゴンは，洋行客が東洋で目にする最初のヨーロッパの都市という

3）カイロ，アデン，コロンボ，シンガポール，香港，上海という東洋航路の形成において，フランスは英国に圧倒的に後れをとった。「東洋の真珠」という美称は，事実上，サイゴンしか主要なハブ港がなかった事情を覆い隠す修辞でもある。その点で，一帯一路構想にもとづいた中国の影響の強い港のリンクが「真珠の首飾り」（アメリカ由来のString of Pearlsの訳語）と称されるのは，英国の寄港地に対して一帯一路がどのような歴史的な意義をもつかをもよく言い表している。こうした航路形成とその表象については橋本・鈴木（2017）を参照。

ことができる。ただしこれは、ヨーロッパの都市を見て後に納得することであるので，最初期の記録にサイゴンの街並みや特色を詳述したものは少ない。

20世紀に入ると日本の船客も，聖俗の権力の中心がブルヴァールによって誇示されるサイゴンの街並みが他の寄港地と異なる，と特筆する記録が現れ始める。そもそも戦前の日本で，サイゴンを寄港地とする航路はおおむね二種類に分類できる。一つは，インド洋と地中海を通るヨーロッパとの往復便であり，もう一つはブラジルを目的地としてインド洋から大西洋と太平洋を抜けて日本へ周遊する便である。前者は洋行客が中心であり，後者は主にブラジルへの移民が多かった。つまり，洋行の場合は，横浜や神戸，門司から出発して，香港や上海などの中国大陸を経て，シンガポール，コロンボ，アデン，カイロと寄港して地中海に入る。南米への移民の場合は，コロンボからアフリカのザンジバルやケープタウン，ダーバンなどを経てブラジルへ向かった。その際，それらの都市の印象においては、寄港する順番も重要だった。サイゴン港は，往路の場合，親しみある中国文化圏の上海ないし香港の次で，復路の場合は，同じく在留する日本人の多いシンガポールの次に碇泊した港である。シンガポールや香港といった商業の港に対して，サイゴンはアジアとヨーロッパが混在しており，気楽に羽根を伸ばしつつ，異国情緒を満喫できる都会であることに特徴があった。それはもちろん，歓楽街の存在が無視できず，フランス船の場合は，時に数日以上碇泊したことも大きい。インドシナでの軍務を終えたロティも，サイゴンではなく長崎で碇泊したのが，「お菊」との「結婚」の始まりだった（Vann 2018）。二つの港は，当時の男性の船客にとってまさしく真珠のように輝く存在だったのである。

それでは彼らはサイゴンでどのように過ごしたのだろうか。記録を見る限り，1860年代の渋沢や70年代の柳北の頃から，久々に陸に上がる洋行客の旅程は共通していた。街を散策し，植物園で珍奇な動植物を眺め，その後は「妓院」に登るか，隣接するショロンというサイゴンとは異なった様式と秩序で造られた巨大な中華街へと足を運ぶのである[4)]。これはサイゴンの車夫たちの間でも了解されていたようだ。例えば商人高田善治郎の失敗談がそれを示唆している。ロンドンへ向かう途中で寄港した高田は郵便局に行こうとしたのだが，英語が通じず，いつもの定番と思い込んだ車夫に植物園へ連れていかれたというのである（高田1891, 16–18）。

ブラジルへの移民を乗せた船でも，サイゴン滞在はほぼ同じであった。移民船で監督を務めた経験があり，それを小説にした石川達三の『蒼氓』（1939）はその典型である。例えば「村松監督はサイゴンの見物に上陸して，午後から夜までひとり歩きまわった」と記し，「有名な植物園からテアトル・イムペリアルの前の広場に廻り，コンチネンタル・パレスという一流のレストオランで食事をし，ボルドオの葡萄酒を飲んだ」（石川2014, 140）という一節は，ほぼガ

4）いみじくも柳北の孫朝一（ともいち）は，1913年から3年間，サイゴンの名誉領事館に赴任し，島崎藤村や鶴見祐輔などの訪問者を歓迎しサイゴンを案内したことで知られる。一方で，朝一は，当地の「醜業婦」が時に横死する悲惨な境遇に同情し，しばしば旅費を与えて帰国させていたという（柏木1992）。

イドブックそのままの観光である。植物園，オペラハウス，そのすぐ横のホテルといずれも今なお観光名所となっている場所である。フランス帝国そのままに植物園と帝国劇場を眺め，パリのコンティネンタル・ホテルにちなむ1880年に建造の同名のホテルでレストランに入りと，フランス人であるかのように一日を楽しむのだが，次の一節で，日が沈むにつれて彼はあくまで異邦人であって，植民者の特権は幻想であることを思い知らされることになる。

> 日没時の匂いやかな風が熱帯間の鉢植のあいだから流れこみ，まだ明るいアヴェニュの深緑の葉のあいだに黄色い電燈がつくと，このレストオランの柱廊の軒に蝙蝠が飛んだ。となりのテーブルでは仏人の男女がアイスクリームの匙の上からやさしい話を囁きあっていた。植民地居住のフランス人たちの，今はちょうど散歩の時間であった。ビズネスを終り夕食をすませて，美しく装うた妻と子供とを連れた軽い白服の紳士が，帽子もかぶらずにぞろぞろと腕を組んで広場を散歩していた。すると街全体がこまやかな情緒をもって，ゆたかさと教養とをもって暮れて行った。そして一歩横道に入ると鳥のように痩せて汚い支那人の車夫が黄包車を曳いて客をあさり，汗だらけで走り廻っているのであった，劣敗の黄色人種という考えが村松をふと憤らせた。（石川 2014, 140–1）

このアヴェニューというのは，サイゴン大聖堂の前に伸びる現在のドン・コイ通りのことである。ここで対照されているのは，フランス人の男女や家族に対して，一人でいる村松監督と中国人の車夫である。植民地で支配者のように振る舞う優雅なフランス人家族を目にして，自分がただ一異邦人として見物しているだけであることに気づかされ，裏通りで汗水流して働く車夫と同じ存在であることを実感したことになる。ホテルや劇場，それにレストランは，フランス人たちを主人として設計されており，語学力と人脈がなければまず参入することができない社交場である。そういった事情は，柳北のパリ滞在記によく表れている。柳北は，ヴァレンチノ劇場こと「ワランチノの歌舞場」に出かけ，おそらく十分に理解できなかったのだろう，「過半は遊冶少年なり。婦女も亦私窩子を多しとす」（井田2009, 49）と娼婦の客引きの場を目の前にしつつも，『柳橋新誌』という遊里文学の著者らしからず，すごすごと「寓に帰る」しかなかった。ただし，柳北はフランス語を特訓していた。そして3か月ほどした1873年2月になると，こういった劇場で出会った高級娼婦との悲劇である『椿姫』を，おそらくは最初に見た日本人の一人となり，梗概を詳しく記すまでになっている。そして，その後の柳北は，しばしば「ウァランチノに遊ぶ」ことになるのである（井田2009, 77, 83）。むろん，フランス語を能くしない短期滞在者にそんな機会は望むべくもない。石川が描く村松は，そんな異邦人がサイゴンに上陸して味わう高揚感と疎外感が巧みに対比されている。フランス人のような一日を過ごしたと思えて，それはよそ者の錯覚であって，夕闇が迫るにつれ，自分はあくまで中国人と同じ黄色人種の労働者だということを思い知らされるわけである。これは，日本に残された植民の

新天地がブラジルくらいしかなく，しかもそこへ労働者として移民するしかない当時の世界情勢を見せつけられ，敗北感を味わうという『蒼氓』の主題とも深くかかわっている。

そして華やかで眩しい表通りから，頭をめぐらし裏通りに目をやれば，そんな寂寥感を抱いた男性の無聊か不満を受け止める女性たちの店への道が開けていたことだろう。少なくとも車夫はそんな男性客を目にすると，何らかの手引きを行ったようである。『蒼氓』に記述はないが，そんな「地獄」への道を案内されそうになったという記録が残っている。それは実業家の渋沢秀雄によるもので，おそらく最初にサイゴンの「妓院」に言及した栄一の息子である。ほぼ石川達三と同時代にサイゴンを訪れ，人力車で植物園内の珍しい動物を見物した渋沢によれば，「車曳の支那人は，駈けながら後ろを振向いては，お世辞笑いをして，あやし気な仏蘭西語で頻りに何か喚いている。よく聞いてみるとダーム・フランセーズ，ダーム・シノワーズというのである。仏蘭西人でも支那人でもお気に召した婦人のいるところへ御案内しましょうとポン引をやっているのだ」というのである（渋沢 1936, 108–109）。もちろん渋沢は，「人間動物園の見物は見あわせることにした」と洒落で済ませて詳細は語っていない。詳細は不明ながら，柳北の親族でもある長田秋濤によれば，1910年代，サイゴンの町はずれの「ピエール十五番舘」が，「安南の老媼エメリーの経営せる待合」であったという（長田1917, 327）。ベトナムのハイフォンを舞台にした岸田国士の『牛山ホテル』（1929）にも関連するような科白がある。台湾を皮切りに，上海，サイゴン，シンガポール，そしてハイフォンへと流れ着いた鵜瀞（うのとろ）というS商会の社員が，「仏蘭西人の妾」である「やす」に対してふざけかけ，「おれだつて，かう見えて，月夜の晩に，西貢の植物園を，女に泣かれながら，夜通しうろついたこともあるんだ」と虚勢を張るのも，同じような女性との関係を示唆するものだろう（岸田1929, 113）。

石川の『蒼氓』が巧みなのは，ここで監督の村松が船内での赤痢発生という知らせを受け，急遽，船に戻るところである。これは多分に石川の意図的な対比であろう。石川は，移民船での船旅を，別途『最近南米往来記』（1931）という旅行記にまとめており，それをみると，おおむねそれが『蒼氓』に生かされたことがうかがえる。その紀行文によれば，赤痢の発生は記されていないばかりか，そもそも船内の移民は伝染病の恐れがあるとしてサイゴンへの上陸が許されていない。つまり石川は，移民を監督する特権ゆえに，サイゴン植物園にて撮影したという写真を見る限り、洋装してサイゴンを楽しんだと考えられる（石川1931, 38–42, 48）。先の渋沢が好例なように，サイゴンを訪れた日本の旅行者は，パリ風のサイゴンに対して，隣接するショロンを闇としてしばしば対比した。都市計画とは無縁な中華風の街路や寺，そして労働者や商人がひしめく店，それに船客を相手にしていた紅燈の下の「醜業婦」こと娼婦たちがその典型である[5)]。こうしたフランス人地区と中国人地区が混在する都市を，石川は，車夫，黄

5）こうした1930年頃のサイゴンにおける二つの都市を，自身の体験から対比したのがマルグリット・デュラスの『愛人』（1984）である。白人地区を「防波堤」に例えつつ，「私」は，いわばその「汽水域」である渡し船の上でショロンの中国人男性と出会い，その愛人となった高校（リセ）時代を回顧する。

色人種，伝染病という，一ひねりした連想で急展開とともに描写している。それはまた東洋の真珠を取り巻く危うい位置を浮かび上がらせるものでもあるだろう。東西の要素が混じり合う汽水域のような都市としてのサイゴンを的確に描く『蒼氓』で，「娘子軍」と移民の接触が避けられているのは当然とさえいえる。行動と心身を管理されるブラジル移民事業において，いわば悪しき先例とみなされたのが，次節でとりあげる「娘子軍」だったからである。

仏領インドシナにおける「娘子軍」と「同胞」の発見

サイゴンの「娘子軍」についての表象は，日本の経済進出と植民地化を曖昧に覆い隠す南進に伴い，大きく変化することになる。なるほど彼女らについては，海に開けた九州の西側にある長崎や熊本出身が多く，唐（から）こと外国に出稼ぎに出る意味から派生した当地での「からゆきさん」という呼称が今は一般的である。ただし，戦前はもっぱら「娘子軍」か「醜業婦」と呼ばれ，1930年代に後述の映画などで少し使用されはしたが，この言葉が一般に広まったのは，山崎朋子の『サンダカン八番娼館』（1972）や森崎和江の『からゆきさん』（1976）以降のことである。いずれにせよ，自ら発言することも，そのような機会もほとんどなかった彼女らをどう呼ぶかで，語り手の立場が如実に映し出される。「娘子軍」は，海外雄飛して植民地を開拓する男性の先遣隊という消極的肯定ないし揶揄を示唆し，「醜業婦」は「正業」ではない職業に従事しているという積極的な否定を示す。ただ，その「醜業婦」や類似した表現にしても，「公娼」を「正業」とみなすかどうかで立場が分かれ，それゆえ単に「移民」としてみなす意見も看過できない。そのような語り手に半ば翻弄された歴史をふまえたうえで，本稿が扱いたいのは，仏印における彼女らへの視線がどのように変化したのかである。

その点で，1910年代の廃娼運動で焦点化されていたのは，外国人を相手にする日本人娼婦であり，日本が海外に進展してゆくために必要とされた「日本人男性のための日本人娼婦」ではなかったという指摘は極めて示唆に富む（嶽本2015, 110）。南進論を世に知らしめ，その古典として読み継がれることになる竹越与三郎の『南国記』（1910）は，ちょうど同時期の刊行であった。以降，サイゴンは，西洋化が目的の洋行の途中で半ば骨休めに立ち寄るだけでなく，仏印や南洋へのさまざまな南進に向けての基点や中継点として下船する人々が増え始めていく。それに従ってサイゴンの国際的な名物となっていた日本人娼婦に注目が集まり，「同胞」として共感するだけでなく，国辱的という批判も盛んになっていったのである。

そもそも「娘子軍」はいつ頃，サイゴンや仏印に現れたのか。密航も多く文書も不十分なため特定はできないが，1880年代に進駐してきたフランス軍兵士を想定して派遣されたのではという説がある（柏木1979, 209）。となると，トンキン侵攻に際して1883年から従軍したロティが，どこかでこうした九州出身の女性と接触し，それが1885年の長崎駐留につながったのではないかと想像は膨らむが，裏付けとなる記録はない。確かに，19世紀後半から20世紀にかけ

て，サイゴンなどで現地か日本人の女性を一時的な結婚の相手とすることは珍しくなかった。ロティの軍隊が長崎へ駐留したのも，トンキンに従軍したフランス軍の補給という休暇のためである。サイゴンでも長崎でも，そこで着飾った東洋人の女性を写した写真や絵葉書が多く残されていることは，単身で赴任するフランスからの官僚や軍人の増加が，「娘子軍」の需要を高めたことの傍証といえよう。ロティは，着物姿の日本人女性との写真を残しているが，そんなふうに女性を撮影した時に性的な写真やそれをもとにした絵葉書は，印刷物の検閲が厳しかった当時，一種の地下出版物として流通していた（Lessard 2009）。そんな絵葉書は，英語圏や日本で「フレンチ・ポストカード」と呼ばれ，広くコレクションの対象となっただけでなく，時に本国にいる受け取り手に対して性的な関心を刺激し，植民地への搾取に満ちた訪問を誘引した（Staszak 2015）[6]。まさしく前節で稲畑が記した「男子を呼ぶ媒鳥（おとり）」だったのである。

ここで注目したいのは墓である。海軍大佐の加藤壮太郎は，1885年に死去したと記された日本人女性の墓碑を仏印で目にしたというが（宮岡1968, 164），こうした「娘子軍」の墓に言及した著作は極めて少ない。例外が前節で触れた長田秋濤であった。長田は持論の南進論を展開した著書で，彼女らのいわば「野晒し」になった無縁墓について悲憤を隠さなかった。日本人女性が男性よりもはるかに世界中に進出しているにもかかわらず，それが不当に無視されていると憤り，「苟くも世界人類の生棲する處必ず日本婦人あり，両して彼等の多くは所謂日本ムスメにして，其業務たるや言うまでもなし。随って海外に於ける日本婦人が発展の経路を辿り，且つ其状態を記さんと欲すれば勢い醜なる彼等の半面を曝露せざる能はず，此れは彼等に封して甚だ残酷なるのみならず，又以て同胞の恥び能わざる所なるべし」と嘆くのである（長田1917, 167–168）。このように放浪を強いられた彼女たちは、家族をもつこともなく年老いて異国で死にゆく。「試みに世界各地に於ける我が邦人の墓地を見舞え，累々として立てる墓標の主は，十中七八必ず彼等の骨にして，所謂紅怨の亡骸なり」として，例外的に「富める外人の妾」となるという僥倖を手にするものもいるが，ほとんどは誰からも見捨てられ「樒花一枝残んの骸に額づきて彼等が冥福を祈るの兒孫なく，異郷の風露冷やかに骨を弔う」こととなり，「何時しか無名の墓となりて朽ち果つるなり」というのである（長田1917, 168）。

興味深いのは，そのような最後が待ち構えているからこそ，「彼等は笑い，彼等は歌う」ことで男たちの慰撫に身を捧げ，時に「情夫」に稼いだ金品を施し，「後進青年に成業の因を為す事」があると記すところである。そこで長田は，「空しく異郷の骨」となるくらいなら，いっそこうした援助をする「女侠」になった方がよいとまで述べている。この虫のいい提案は，「椿姫」という今なお使われる題名で，デュマ・フィスの『椿姫』（1848）を初めて全訳したのが長田であることと無縁ではあるまい。「歌うや痛恨，笑うや切々，赤くして血」の如き彼女らが「後進青年」を押し上げるという一節は（長田1917, 168），恋人の父から乞われて，彼の将来のた

6）ただし仏印の日本女性の裸体例はまれで，「名誉白人」という独特の位置を強調する研究もある（Roustan 2012, 88）。

めにあえて身を引き，結核で孤独に死ぬ椿姫の物語を想起させずにおかないからである。そもそも『椿姫』は，遺品の売立から真相を解明し，墓参によって完結する物語であり，無縁仏の汚名をそいで成仏させる行為と共通する。花街を好み，『世界の魔公園』（1911）でパリの斯界について詳述した長田は，椿姫の物語には大いに親しみを覚えたことであろう。政財界に人脈を持ち，大陸浪人のように放浪した長田は，『新赤毛布―洋行奇談』（1902）や『新々赤毛布－露西亜朝鮮支那遠征奇談』（1904）で各地で見聞きした「醜業婦」の悲劇や活劇を多々紹介していた。これらの書物の間に刊行されている『椿姫』（1903）の翻訳も，同じ関心による文業とみなすことも可能だろう。

その点で森鴎外の「舞姫」（1890）が，サイゴンに碇泊中の船中で書かれた手記という設定なのは示唆に富む。鴎外は専門の衛生学という点からも，兵士の進駐であれ官吏の駐在であれ，異郷での長期滞在に伴う男性の性欲管理に高い関心を寄せており，例えば『独逸日記』には「伯林には青楼なし。故に呵啡店は娼婦の巣窟」という観察と，それに関連する男性の記述が多々見られる（西2013, 93–5）。そして「舞姫」は，性欲の管理に失敗した気鬱の主人公が，港の花街に出かける気にもなれず「今宵は夜毎にここに集い来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて，舟に残れるは余一人」と，船室で孤独に書き記した物語といえる（森1971, 425）。往路ではすべてが目新しく映り，見聞した事を細かく書き記したものの，帰路はおよそ何も記す気になれないとは，鴎外が実際に公表した日記と一致するが，作家の実体験かどうかはともかく，前節で見たようにサイゴンは，主人公が留学していた壮麗なベルリンの街並みとそこで出会った「舞姫」，さらには「珈琲店に坐して客を延く女」（森1971, 429）のような存在が目に飛び込む街であった。主人公が高揚して記す「大道髪の如きウンテル，デン，リンデン」とは，「遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交わしたる中より，半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像，この許多の景物目睫の間に聚り」とあるように，ブランデンブルク門から延びるブルヴァールにほかならない（森1971, 427）。そして主人公が恋人となる女性に出会うのは，「獣苑を漫歩して，ウンテル，デン，リンデンを過ぎ」た教会の前である（森1971, 430）。あとは横浜まで同じような居留地への寄港が続くことを考えれば，ベルリンと共通するヨーロッパ風の街サイゴンは，「舞姫」を想起するのにもっともふさわしい。冒頭の一文「石炭をばはや積み果てつ」も，もはやヨーロッパに後戻りできない地点に来たことを巧みに示唆していよう。

この石炭を積み込んだばかりの，おそらくはまだ粉塵が舞う船で手記を書くという設定も「舞姫」の主題と密接に関連づけられよう。というのも，特に1880年代以降，この石炭を運ぶ船の底に隠れてしばしば密航したのが日本の「醜業婦」だったからである。当時，石炭は，無数の男女が抱えて船まで積み込まねばならず，こうした作業にまぎれて女性たちもまた積み込まれた可能性が高い（未央2020, 53–6）。そんな密航の手引きは，「からゆきさん」という言葉をいち早く使用した映画『からゆきさん』（1937）にも登場する。碇泊中の船に，夜霧に紛れて小舟から女性たちが乗り込み，髭を蓄えた外国人らしい船員が手引きをして，6人の女を自分た

ちの居る石炭倉庫に引っ張り込んで乱暴に扉を閉めるのである。こうした密航婦は，石炭を運ぶ船に忍び込んでまず門司などから上海に，そこから各地に半ば売られていくというのが定番だったという。戦前に刊行された報告や旅行記に，関連する記述が多数みられることから，戦前の男性中心の旅行者のあいだで娼婦の話題が半ば公然と，眉をひそめるか口をゆがめるかはともかく，取りざたされていたことうかがえよう（宮岡1968）。ここで重要なのは，彼女らの出身地が石炭の積出港と多く重なるところである（宮岡1968, 234）。当時のサイゴンは，船とそれに乗り込んだ男性船客の性の補給地だったので，「舞姫」が上陸せずに船内で書かれたという設定は，この小説が石炭と女性を消尽して進む近代化の象徴たる船と不即不離であることを指し示していよう。男性が主体の富国強兵において，女性と石炭が相半ばして消費されたことは，半世紀後の山岡荘八の短編「からゆき軍歌」でも示唆されている。天草からおそらくは石炭船に乗ってラングーンで外国人相手の「からゆき」となった女性が，同じく石炭船に乗って帰国するものの，結局，長崎で「石炭船の船員相手」に酒場で働くしかない姿を描く短編である（山岡1939, 4, 8）。

こうした人身売買に対し，帝国主義が本格化した1890年代以降，ようやく日本政府は規制に向けて重い腰を上げる。とはいえ効果が現れたのは1930年代になってからのことであり，この頃には，帝国主義の先遣隊として「娘子軍」とも呼ばれた彼女らは，「同胞」の立場から「国辱」だと非難されるようになっていた。こうした変化のなかで彼女らをいち早く取り上げた記念碑的な作品が，前述の岸田国士の戯曲「牛山ホテル」（1929）である。モデルとなったのは「からゆき」の女性が経営していたハイフォンの石山旅館で，実際，岸田が当地に滞在していた時の経験をもとにして書かれている。主筋は，フランス人の妻と離婚訴訟中で，日本の愛人を連れて帰ることに躊躇する日本人男性を中心に進む。西洋化と富国強兵が国是であった時代，洋行した日本の男性は西洋文化を学び順応すればするほど，その成果を持ち帰るべき祖国への違和感が表面化することになる。鴎外の「舞姫」は，それを異人種間の恋愛と衝突として描いたといえるが，こうした「ヨーロッパにおける日本人の悲劇」を自身のフランス留学の経験をもとに『古い玩具』や『チロルの秋』など異人種間恋愛としてすでに展開していたのが，岸田国士だった（渡邊1982, 53–4）。この戯曲でのハイフォンは，フランスにも日本にも帰属しない場所でありながら，そこに根を下ろすことはできず，いつかどちらかに帰るべき中継地として描かれている。ホテルが舞台であるのも，ハイフォン自体が一時滞在の場所であったことと結びついており，ここにおそらくは意に沿わない形でフランス留学から帰国した岸田の心象をよむことも可能だろう（渡邊1982, 62）。西洋と日本の間にあって帰属に逡巡する知識人という点で，「牛山ホテル」は「舞姫」の主題を継承しており，サイゴンとハイフォンの違いはあれ，ここでも仏印は異国から故国へと移行する分水嶺と見なされていたといえる。

1930年代になって「娘子軍」が「国辱」として否定されるようになった背景には，彼女らが多く住み働いていた南洋の植民地化が、1936年以降，国策となったことと無関係ではない。南

進論が官民一体で盛んになるのと軌を一にして，日本にもフランスにも属さない文字通り汽水域であった当時の安南を，かつて日本の勢力圏であったかのように見出していく試みが盛んになっていく。その契機となったのが，1927年から翌年にかけて渡欧の途上で，東南アジアを弟子の岩生成一とともに調査した歴史学者の黒板勝美と考えられる。二人はこれまで断片的に報告されてきたホイアンなどに残る「同胞」の墓や痕跡などを系統的に調査した。例えば，アンコール・ワットに残された落書きの存在は知られてはいたが，それを解読して記録したのが黒板である。さらに実地調査を西洋や日本の記録と照合して，日本から多くの商人らが南洋と往来していたことを明らかにし，これらの調査は，弟子の岩生によって『南洋日本町の研究』（1940）という記念碑的な大著へと結実する。むろん研究は極めて実証的だが，南進論を正当化する根拠として利用され，時に歪曲されて受け取られたことは否定できない（橋本2024, 2025）。また黒板は，例えば帰国後の講演「南洋に於ける日本関係史料遺跡に就きて」（1928）で，南進の先駆者として「日本町」を顕彰しようとする意図を隠すことがなかった。特記すべきは，黒板の研究以降，日本の南進の先駆者として，16–17世紀の貿易に従事した男性商人が顕彰され，その墓に注目が集まったことである。例えばホイアンにある谷弥治郎兵衛，蕃二郎，具足君という17世紀の墓は，黒板の調査後に，本格的に保存と顕彰されて，今も残る観光名所となった[7)]。黒板はいずれの墓石も東北を向いていることを強調し，「もし私に憶測が許されるならば，恐らく日本に向けて石を建てたのであつて，故国に対する憧憬の心が此墓石の方向に於て，現れて居るということも過言でないかも知れませぬ」と，あくまで十分な根拠ではないことを断りつつ，望郷の念が墓石の方向に現れているのではないかと述べたのである（黒板1928, 26）。しかし，そんな留保は忘れられ，その後，この墓は日本の方を向いていると記すのが紹介の際の決まり文句となっていく。実際，ユエで写真館を営む「中山氏」の尽力により修復された墓では、現在の案内板にも墓石は日本を向いていると記されている。

これは，1880年代に見かけたという日本人女性の墓が，言及されるだけで保存されることなく，長田の「紅怨の亡骸」への悲憤もおよそ実を結ばなかったことと実に対照的である。ここで男性が強調されたのは，外国人相手の「醜業」や「国辱」の恐れがあるからと日本人女性の渡航が厳しく管理された同時期の事情とも関連づけられよう。黒板はその講演で，次の引用のように，17世紀頃のヨーロッパのアジア進出と日本の商人の活躍をあたかも互角に同じ植民地化の土俵に立っていたようにみなしている。つまり，「長崎がポルトガル人に依って開かれ，ポルトガル人が治外法権を一時有って居ったのは如何にも日本の国辱に相違ありませんが，同時に日本も亦ツーラン［現ダナン］や，フェイフォ［現ホイアン］，安南に於て同じような自治権」のある「日本租界町を有していたことは愉快な感に打たれる」というのである（黒板1928, 19）。つまり，日本の帝国主義の先駆けといえるため，快事ということになる。それだけに，そのツー

7）確かに1922年の段階で，大阪外国語学校講師の瀬川亀が現地調査を行い，谷弥治郎兵衛と具足君の墓の写真を掲載するなどして一定の注目を集めたが（瀬川1922），修復までには至らなかった。

ランの「最も地の利を得た区域」で，「現に今フランスの地方政丁がある地点，又立派なホテルのある区域が丁度日本人の占領して居った日本人町」だったものの，それが今では何の痕跡も残していないと，前哨地を失ったかのように嘆くのである（黒板1928, 16）。その点で日本の仏印進駐以降，サイゴンのマジェスティックのような随一の老舗ホテルが，日本ホテルと改名されたのは，黒板の議論でいうならかつての「日本人町」を奪還したともいえるだろう。フランス極東学院第1回交換教授として，1941年5月から南部仏印進駐の直前まで派遣された木下杢太郎の旅程も示唆に富む。杢太郎は岩生の『南洋日本町の研究』を参照しながら「古昔の日本人の活動の蹟」を見学しており，フェイフォの墓ももちろん訪れている（木下1949, 521–5）。極東学院が希望する東洋学者ではなく，医学者の太田正雄こと杢太郎が選ばれた経緯と舞台裏については詳細な研究があるが（藤原2008, 433–5），東洋学の情報提供者ではなく，フランスが植民地支配の正当化に使ってきた医学の専門家派遣という宣伝効果は無視できまい。特に北里とペスト菌の発見を争ったとされる「老イエルサン」に杢太郎が面会したのは（木下1949, 444, 475, 511），東西だけでなく新旧の世代交代を印象付ける作用もあったのではないか。

このように黒板の講演と岩生の研究書は，1930年代以降，「南洋」での日本人の足跡をたどる研究とそれを描いた物語の隆盛をもたらした。海禁策によって新たな人と物の流入を絶たれ，それこそ長田が記したように徐々に朽ち果て，「異郷の風露冷やかに骨を弔う」に至る日本町を嘆く言説が，倭寇や日本町の隆盛とその最後を惜しむ形で繰り返されたのである。その典型的な例が，その筆名通り，南進と南洋を主題とした小説で人気だった南洋一郎の短編「日本甲螺船」（1940）であろう。甲螺船とは，朱印船貿易で日本の商人が使っていたとされる船のことで，フェイフォの日本町から南洋へ出航していた船の一団が，英国の海賊船に襲われ，首領を倒すものの，鎖国ゆえに補給を断たれ，緩慢な死を迎える。その英国海賊は，倭寇の物語に転用されたジョン・デイヴィスなのだが（橋本 2024），「日本甲螺船」では，日本の女性船長がデイヴィスに捕らえられ，人質として船と積み荷が奪われようとするのを見て，彼女は足手まといにならぬよう，隠し持っていた短剣で自害する。それを見て船乗りは英国船に襲い掛かり，決死の乱闘の末に日本町に戻るのである。辛くも生き延びたものの，鎖国ゆえに故国に帰れず補給もない彼らは，フェイフォに「小日本」を築きつつも衰退するしか道はなく，その墓も人知れず草に埋もれてしまう。ただし，「祖国へのはげしい思慕」から，墓は「東北に面してたって」いると（南1940, 324–5），ここでも黒板の推測がいわば裏書きされるのである。

「日本甲螺船」で南海を駈け廻る日本人女性が都合よく殉死するのは，南進の足掛かりとして「娘子軍」のような女性の存在を消し去ろうとする機運ないし宣伝とまさに軌を一にするものであった。実際，1940年から「醜業婦」のような日本人女性像を否定し，日本人男性に対する良妻賢母としてその名も「南進女性」という存在が盛んに推奨されていた。おそらくは宣伝の一環だろう，北部仏印進駐を控えた1940年になるや「南進女性」という言葉が雑誌や書籍に続々と登場し始める。先鞭をつけたのは『蒼氓』の石川達三だった。石川は「南進女性」（1940）と

いう短編を発表し，女子専門学校を出たばかりの快活で優秀な女性が，級友の兄という伝手でサイパン島で働く男性と縁組をし，不安を抱えつつも南へ赴く物語を描いた。すぐに映画が製作され，関連して雑誌でも南進女性の特集や座談会が次々に組まれている。そんな「南進女性」が喧伝される直前の1939年，陸軍に依頼され中国南部から「女ひとり佛印へ行く」ことにした画家の長谷川春子は，図ったかのように日本軍が進駐した仏印の日常の姿を筆と絵筆で伝える宣伝に従事する。その画文集のなかで長谷川は，ハイフォンの石山旅館をなんの変哲もないホテルとして描く一方[8]，仏印にいる女性が「年増」ばかりになっていると警告し，「若い娘の進出が止った場合は，邦人の進出がふるわない」と南進を呼びかけたのである（長谷川1940, 36）。帰国後も，長谷川は「南進女性の現地報告」という座談会で，「日本の女というと，支那人よりも薄汚いじゃないかと，世界中から誤った眼でみられている」現状に憤慨し，「日本にもこういう生きのいい女（笑声）がいるぞということを宣伝にしに出かけた」と語っている（『戦線文庫』1941, 138–9）[9]。陸軍か長谷川個人によるものかはともかく，これまでの「娘子軍」や「醜業婦」とは異なる日本人女性像を「南進女性」の名で上書きしようという意図は明白であろう。

この仏印行きで長谷川は，ハノイのフランス極東学院で働く「半島生まれの金さん」に，休館日に特別に展示を案内されている。おそらく『印度支那と日本との関係』（1943）の著者金永健であろう。金は1931年に極東学院で働き始め，補助司書と日本部主任として1940年10月に日本がハイフォンを占領するまで在籍していた（ユン2010, 317–20）。朝鮮半島出身の男性知識人と日本人女性の画家がハノイで面会できたのは，仏印に「娘子軍」が出稼ぎに行く時代から兵士が「進駐」する時代へと変化したことを如実に象徴しているが，長谷川はさして関心も感慨も抱かなかったようだ。一方，金が「嘗て，河内で逢うた或る女の方の話しに依ると，西蔵へでも行くような気持で，印度支那へ来たのだという」と呆れ気味に記しているのは，日本軍進駐時の渡航ゆえに長谷川のことかもしれない（金1940, 194）。金は十年近いハノイ滞在でおそらくはさまざまな「娘子軍」を見聞きしていたことだろう。後に17世紀の河内（ハノイ）で通訳として活躍した日本人女性ウルスラについて詳述する金は（金1943, 53–5），長谷川に代表されるような「南進女性」の及び腰に対して，所詮，短期滞在者でしかないとその限界を冷静に見抜いていたと思われる[10]。

とはいえ、少なくとも出版物においては，文化と民族と性とが混じりあう汽水域のように描かれ，それがまた吸引力だった仏領インドシナは，日本人男性が主役である帝国主義の舞台と

8）大阪外国語学校のフランス語の教授だった畠中敏郎も，「卒業生の多くが外国へ出て行って第一線的な働き」をする以上，日本軍進駐後は仏印が活躍の場になるとして視察した記録で，石山旅館は岸田国士の「牛山ホテル」のモデルと記しつつも，その日常性を強調している（畠中1943, 4, 50）。

9）座談会は「南進女性」7人と，後に大本営所属となる平出英夫海軍大佐で行われた。この海軍発行の慰問雑誌でも，1940年以降，南方の写真と南進という用語が頻出するという（押田2016, 167）。長谷川については北原恵や吉良智子による研究が詳しいが、長谷川の「移動」を「南進女性」の文脈で位置付ける試みはまだ十分ではない。

10）金の「父君が大阪の外語の教師をしていた」（長谷川 1940, 27–28）というのは確認できていない。なおウルスラは「朝鮮系日本婦人」ともいうが（岩生1939, 549），金は否定している（金1943, 65）。

して半ば一元化されてしまう。そんな南進する日本の女性と男性について，宣伝とは無縁な姿が描かれるには，林芙美子の『浮雲』（1951）まで待つほかはなかった。「海国日本の南進論も男ばかりでは本当でないし，優秀な女は行く必要を認めないというのが普通で，自然の結果として結婚闘争に負けた女が国策に沿うという皮肉な現象はたしかに有った」（石川1941, 71）という，南進女性をめぐる舞台裏が『浮雲』ではあけすけに活写されている。仏印に向かう独身タイピストたちの配属で，自分は「小巴里」のサイゴンでなかったことに対し，「そうした命令が，女にとっては，顔かたちの美醜にある事も，ゆき子はよく知っている」（林1977, 179）とは「外地」でこそ一層露骨になる性差別であるが，そんな彼女らも引き揚げで一緒になった「軍で呼びよせた慰安婦」（林1977, 171）と結局はさして違わなかった実情がいきなり冒頭で突きつけられる。その幸田ゆき子が配属されるダラットのパスツール研究所は，イェルサンが創設に尽力し，彼女のいう平凡で奥深い高原に避暑地が開発される基盤となった[11]。そこで彼女は林業を調査する農林技師の富岡兼吾と出会い，男の不誠実さにうんざりしつつも別れられない仲になっていく。羽矢（2002）以降，『浮雲』の仏印描写が多く明永久次郎 の『仏印林業紀行』（1943）に依拠していることが明らかにされたが，林業に限らず，南進を植物の移植で語る表現が作中に多いことは見逃せまい。富岡がダラットに「植栽されてゐる，日本の杉の育ちの悪さ」を当地の日本人になぞらえ，サイゴンで「貧弱な日本人が，コンチネンタル・ホテルなぞにふんぞりかえってている柄でない」というのは，場違いに我が物顔で振る舞う男性や軍への痛烈な批判となっている（林1977, 197, 187）。

そしてここでも「ヘイホ」の墓が登場する。「ねえ，あなた，覚えている？ツウランのそばの何とかって，日本人の墓地にお参りした事もあったでしよ？」と幸田は，富岡に問いかけ，「二人とも狂人みたい」に「真夜中に逢ってた」時の熱情を彼に再来させようとするも，うまくいくことはない（林1977, 269）。確かに描写は『仏印林業紀行』（明永1943, 86–9）ほぼそのままだが，「太郎兵衛田中之墓などと刻んである」と，田畑の中にある農家の墓と読めるよう半ば軽侮して意図的に誤記しているのは特筆すべきだろう（林1977, 270）。そこから「流れる椰子の実のように，何処へでも遠く漂流して行く，昔の日本人の情熱を，ゆき子はひどく勇気のあるものに思い，土まんじゅうの墓碑にも，はな子之墓なぞとあるのに，ゆき子はいじらしい気がしたものだ」と続く。南進論で定番の藤村の椰子の実の比喩を用いつつ，そこでは仮託も想定もされなかった女性の姿を読みこみ，フェイフォの日本人墓地の書籍でまず見られない女性の墓碑をわざわざ追記しているのである。これが屋久島で病死する彼女の最後を重ねた伏線なのは言うまでもないだろう。そしてこの「土まんじゅうの墓碑」が再び注目されたのは，約20年後の山崎朋子の著作『サンダカン八番娼館』（1972）とその同名の映画（1974）であった。ただし，そんな彼女らの墓がボルネオで「発見」された時，「墓石を日本と正反対の方角に向けて

11）1941年に，木下杢太郎も同研究所を訪問した後，サイゴンに向かっている（木下1949, 473）。

建て」ているとして，それゆえ「祖国日本にたいする彼女らの固い拒絶」が読み取られ（山崎 1974, 27），それは映画でも喧伝された[12]。根拠のない憶測が繰り返されたのは，皮肉にも黒板の講演と同じだったのである。

おわりに

このように仏印こと，旧フランス領インドシナは，近代日本の訪問者にとって東西の文化が交じり合う独特の「汽水域」といえる存在だった。特にサイゴン港は，パリを思わせる大通りと都市計画ゆえに，ヨーロッパへ向かう明治日本の旅行者が初めて目にする本格的なヨーロッパの都市であり，それは，香港や上海，シンガポールといった英国式の機能的な居留地とは異なっていた。戦前の男性主体の訪問者は，船が石炭を補給するように街に繰り出し，ヨーロッパ人男性のように植民地を支配し，歓楽街で遊べる場所として記憶されることになった。

それは同時に，隣り合うショロン地区や他の東洋の寄港地との格差を見せつけるものでもある。そんな格差の中で海外に出稼ぎに出ざるを得なかった日本の女性たちは，寄港地として訪れる短期滞在の男性船客と著しく対照をなしており，男性たちは複雑な思いでこの「同胞」へ憐憫ないし軽蔑の眼差しを注ぐことになる。森鷗外の「舞姫」から石川達三の『蒼氓』まで，紀行文や小説でのサイゴン描写には，表立って触れられることのないそんな女性たちの存在が背後にあると考えられる。例外的に，長田秋濤は，彼が翻訳した『椿姫』を思わせるように，人知れず埋葬される娼婦とその墓を特記した。しかし，国力が安定し始め，南進論が盛んになる1920年代後半から，仏印や南洋で働いていた日本人の娼婦たちは，目障りな存在とみなされるようになる。彼女らは，日本の近代化ゆえに出国せざるを得なくなり，彼女らの本国への送金は日本の近代化を支え，時に日本の帝国主義の先遣隊として「娘子軍」とも呼ばれたが，日本が東南アジアの植民地支配に本格的に乗り出した際には「国辱」として排除されたのである。

そんな1920年代，黒板勝美などの歴史学者が，洋行の途中で，17世紀日本人男性の墓を「発見」し，彼ら男性こそが「同胞」による植民地支配の先駆者として顕彰されることとなる。黒板はあくまで憶測としてその墓石は望郷の念から日本の方角を向いていると述べたのだが，これがあたかも定説のように踏襲され広まっていった。現地に溶け込んでいったはずの彼らは故国の鎖国に見捨てられた悲劇という枠組みに組み込まれ，その捲土重来としての南進が鼓吹されたのである。そして1930年代に，17世紀に消失した日本町の轍を踏まないようにと，寄港地を拠点とした南進を歴史的に正当化し，外国人を顧客にした「娘子軍」や「醜業婦」を否定し，日本人男性を主体にした帝国主義を鼓舞する言説ができあがっていく。1940年の仏印進駐以降

12）なお現地を訪れた本多勝一は，彼女らの墓が隣接する華僑の墓と同じく斜面を背にして建てられており，そのため日本の方角と正反対にならざるを得ないと指摘している。そして山崎は不誠実だとして，取材者から写真やパスポートを窃取したこととあわせて批判している（本多 1980, 251–4）。

は，そんな南進する男性を支える良妻賢母として「南進女性」までもが宣伝された。こうしてハイブリッドな空間と歴史を体現し，東西が交錯する「娘子軍」のいたサイゴンに代表される仏印は，一時的とはいえ，日本人男性を頂点とする植民の舞台へと作り替えられたのである。

参考文献

明永久次郎『仏印林業紀行』（成美堂書店，1943）
石川達三『最近南米往来記』（昭文閣書房，1931）
石川達三「南進女性」『使途行伝』（新潮社，1941）
石川達三『蒼茫』（秋田魁新報社，2014）
井田進也校注『幕末維新パリ見聞記』（岩波書店，2009）
稲畑勝太郎『欧亜に使して』（日本評論社，1929）
岩生成一「南洋に於ける日欧関係の推移」史学会編『東西交渉史論』上（富山房，1939）
大塚武松編『渋沢栄一滞仏日記』（日本史籍協会，1928）
岡田友和「十九～二十世紀におけるフランス植民地帝国間の移動」『アジア遊学』258（2021）
長田秋濤『図南録』（実業之日本社，1917）
押田信子『兵士のアイドル―幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社，2016）
柏木卓司「ベトナムのからゆきさん」『歴史と人物』1979年10月号
柏木卓司「遣外使節団が見たサイゴン」『歴史読本』1986年11月号
柏木卓司「心優しきサイゴンの外交官」『日本経済新聞』1992年2月25日付朝刊
柏木卓司「幕末・明治の日本人が旅したベトナム」『月刊歴史と旅』1999年7月号
岸田国士『牛山ホテル―戯曲集』（第一書房，1929）
木下杢太郎『木下杢太郎全集』10（岩波書店，1949）
金永鍵「遠東博古學院と印度支那研究」『大陸』1940年9月号
金永鍵『印度支那と日本との関係』（富山房，1943）
久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』5（岩波書店，1982）
黒板勝美『南洋に於ける日本関係史料遺跡に就きて』（啓明会，1928）
渋沢秀雄『熱帯の旅』（岡倉書房，1936）
瀬川亀「我が朱印船の安南通商に就て―仏領印度支那視察報告―」『海外視察録』1（1922）
高田善治郎『出洋日記』（川勝鴻宝堂，1891）
嶽本新奈『「からゆきさん」―海外「出稼ぎ」女性の近代』（共栄書房，2015）
「南進女性の現地報告」『戦線文庫』1941年1月号
西成彦『胸さわぎの鴎外』（人文書院，2013）
橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌―寄港地を読み解く』（青弓社，2017）

橋本順光「倭寇物語の創造」『人文学林』1（2024）
橋本順光「近代日本における征服者の列聖―ワカナの唄とジョヨボヨの予言の発見」『比較文學研究』110（2025）
長谷川春子『南の処女地』（興亜日本社，1940）
畠中敏郎『仏印風物誌』（生活社，1943）
羽矢みずき「林芙美子が書いた仏印」，川村湊編『「戦後」という制度』（インパクト出版会，2002）
林芙美子『浮雲』『林芙美子全集』（文泉堂出版，1977）
本多勝一『ルポルタージュの方法』（すずさわ書店，1980）
藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱』（めこん，2008）
マシュー・フレーリ「航西の東道主人」『京都大学國文學論叢』8（2002）
未央佐希子『からゆきさん―明治の長崎発「東洋日の出新聞」からみえる』（長崎文献社，2020）
南洋一郎「日本甲螺船」『孤島の秘密』（偕成社，1940）
森鴎外「舞姫」『鴎外全集』1（岩波書店，1971）
宮岡謙二『娼婦―海外流浪記』（三一書房，1968）
山岡荘八『からゆき軍歌』（博文館，1939）
山崎朋子『サンダカンの墓』（文藝春秋，1974）
ユン・デヨン「1930-40年代の金永鍵とベトナム研究」『東南アジア研究』48（2010）
渡邊一民『岸田國士論』（岩波書店，1982）
Pierre Brocheux, Daniel Hémery, *Indochina: An Ambiguous Colonization, 1858–1954*（Berkeley: University of California Press, 2011）
Haydon Cherry, *Down and Out in Saigon*（New Haven: Yale University Press, 2019）
Micheline Lessard,“Cet Ignoble Trafic: The Kidnapping and Sale of Vietnamese Women and Children in French Colonial Indochina, 1873-1935”, *French Colonial History*, 10（2009）
Frédéric Roustan,“Mousmes and French Colonial Culture: Making Japanese Women's Bodies Available in Indochina”, *Journal of Vietnamese Studies* 7（2012）
Jean-François Staszak,“Colonial Tourism and Prostitution”, *Tourism Review* 8（2015）
Michael G. Vann,“（Colonial）Intimacy Issues”, *World History Connected*, 2018.